

多元文化論講座

(1) 講義名：多元比較表象論 a

(2) 副題：印刷術の誕生と文化革命

(3) 担当教員：鈴木繁夫

(4) 開講時限：金曜 2 限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

「未来はバックミラーのなかにある」（マーシャル・マクルーハン）という言葉がある。どのような事象も歴史的に把握しないと、事象の外貌にとらわれ事象の実態を見誤り、事象を自分で的確に意味づけることを忘れ、不適切な対処することになってしまう。

前期（A）は、メディア革命という視点から、16-17 世紀の印刷術（紙を媒体とした活版印刷）の興隆によって生じた文化革命について考察し、21 世紀の Web2.0 状況を再考する。

後期（B）においては、メディア革命によって生じた世界観の変化のうち、自然の中に散逸している「驚異」的な物事に人間の「好奇心」が触発されて、人間の視野が広がる一方で、自国宗教文化規範の優越性を再認するといったよじれた方向に展開したことを学ぶ。

(7) 履修条件等：

前期授業Aと後期授業Bを続けて履修することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

インターネットは、今の多くの私たちにとっては、公的には場所と時間の制約からできるだけ自由になって共同作業を行っていくための道具であり、私的には好縁を育成し強固なものにしていくための手段という理解されている。こうした意思疎通メディアへの考え方は、21 世紀に特異なものではなく、西洋では 16-17 世紀にすでに確立していた。この考え方の確立は、千数百年続いた筆耕と羊皮紙を介して修道院・大学図書館をインフラとする、顔が見える対面情報伝達文化に取って代わった。

こうした歴史的視野に立つと、現に私たちが経験し実際に抱いているメディア観、それに付随する文化のあり方も異なって見えてくる。そしてその次に待ちかまえているのは、では自分はどう考えるかにかかってくる。なぜなら現実の心情としては、発信者のわからない情報の波に呑まれているよりも中世的な小さなまとまりの空間のなかで互いに気心が知れている（と思いついでいるか、そう思いついてみたい）共同性に賛成だが、それに積極的に賛成することには、当為必然が含意されていないからだ。

授業では、エリザベス・アイゼンステイン『印刷革命』（原題 *The Printing Press as an Agent of Change*）に沿って議論を展開しながら、こうした図式が成り立っている歴史的

背景をさぐっていきます。

なおアイゼンシュタインは、歴史を記述する際には、いつも暗黙の内に現代の人間観が肯定されており、「価値中立的な語法」（ロラン・バルト）による「いま・ここ・私」に向かって進む歴史として要領よくまとめている。フーコーの「人間の終焉」や「知の考古学」という視点はまったくない。その意味でとてもおとなしい歴史叙述書になっているので、批判的に読むことが要求される。

〔授業方法および計画〕

授業は講義とはいっても、ともに対話しながら考えていく形式で授業を進めていく。また講義の約3回ごとに内容理解を試す小テストを行う。課題へのレポート提出を最低二度行う。

講義の内容は以下の順にそっていく。

1. 未確認の「文化革命」とその特徴
2. 印刷術から捉えたルネッサンスの二段階
3. 聖書釈義を変える印刷術と宗教改革
4. 印刷術を介する<自然という書物>と<知識共同体>
5. コペルニクス革命の背後にある印刷術
6. 印刷術が変えた聖書と自然

(7) 成績評価の方法：

評成績の評価は以下の基準にしたがって行う。授業出席（30%）、授業参加（35%）、小テスト・課題レポート（35%）。

(10) 教科書：

・Elizabeth L. Eisenstein. *The Printing Press as an Agent of Change: Communications and Cultural Transformations in Early-Modern Europe Volumes I and II*. Cambridge University Press, 1982.

・エリザベス・アイゼンシュタイン『印刷革命』（小川昭子 [ほか] 共訳、みすず書房、1987年）[原著の抄訳]

(11) 参考書：

・ジャン＝ジル・モンフロワ『消えた印刷職人：活字文化の揺籃期を生きた男の生涯』宮下志朗訳、晶文社、1995年

・香内三郎『活字文化の誕生』晶文社、1982年

・W. J. オング『声の文化と文字の文化』桜井直文、林正寛、糟谷啓介訳、藤原書店、1991年

(12) 注意事項：

1)教科書・参考書は自分で購入すること。

2)この講義のさらに細かい内容は以下のサイトにアクセスすること（2011年4月10日以降）。<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~ssuzuki/ClassLecture/GraduateLecture.htm>

3)聴講は自由ですが、聴講生もかならず小テストを受け、課題レポートを提出して下さい。

4) オフィスアワーはとくに設けず、面談・質問はメール (ssuzuki アト nagoya-u.jp アトは@に置き換え) で随時受ける。

(1) 講義名：異文化接触論演習 a

(2) 副題：諸文化共生の光と闇

(3) 担当教員：田所光男

(4) 開講時間：月曜 3 限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

諸文化の比較研究の領域において修士論文・博士論文を執筆するために必要な知識を増やし、技法を高める。また口頭発表のやり方を訓練する。

(7) 履修条件等：なし

(8) 講義内容：

#### 1. 論文批評

〈いい論文〉、〈よくない論文〉、とはどういうものかを考えてみたい。絶対にやってはいけないこと、最低限やるべきこと、こうするとよくなること、などを、実際の例にあたっていろいろ検討したい。具体的には、皆さんにとって当面の目標となる『多元文化』や『Autres』に掲載されている論文を、各自が批評する。

#### 2. 諸文化共生の問題の検討

現在、日本でも、中央省庁や地方自治体、ヴォランティア団体、また、大学などの研究・教育機関など、様々な領域で、「多文化共生」ということが盛んに語られている。しかし、この用語それ自体があいまいであり、「多文化」という直訳語はもちろんであるが、「共生」という言葉もどこかいかかわしい。もともと生物学の用語が人間社会に転用されているわけで、愛想はいいが、本当のところよくわからない。

差異をもった複数の集団の共生は、アラブ人とユダヤ人の場合に限られず、実現するのがきわめて難しい理想であろう。モロッコのイスラム教徒アブデルケビール・ハティビはこの種の共生の困難の一般性をこう指摘している。「いかなる国も、たとえその国に複数の言語や思考法が存在しないとしても、複数の存在、文化のモザイクです。しかし、このような複数性はこれまで一度として（もろもろの集団、民族、男女、権力のあいだの）対等な関係として構成されたことはなく、つねに支配被支配の不均衡な関係によって統御されてきました。[中略] 国を形作る異なる複数の要素の間にはつねに潜在的な軋轢が存在します。」〈仲良くやろう〉とか、〈みんな一緒〉というような言葉で示される共同性が隠すもの、抑圧するものがあり、美しく立派な共生を喧伝する公式の言葉に対し徹底的に懐疑的になる必要があることは確かであろう。

しかしこの問題はきわめて微妙である。一切の共生言説を警戒しようと説くこのハティビも、モロッコにおけるユダヤ人マイノリティの境遇を検討する場合には、自分の所属するムスリム・マジョリティの「正義」や「保護」を肯定的に述べている。それは、モロッコ出身のユダヤ人ヴィクトル・マルカが、フランス保護領時代のモロッコ社会を、

植民者フランス人、次いでアラブ人、そしてはるか下にユダヤ人、と三階層で描き出し、独立後のモロッコにおいても、ジンミー言説は公然と生きていたと断言することときわめて対照的である。共生言説を批判する人もまた、自己の所属や自己の差異の問題を通る時、他者を排除しないためには共生言説を必要としてしまうのであろうか。

全体としては次のようなプログラムを予定している。

- 1) 文化的差異に対する態度の三つのモデル
  - a 差別主義、明暗のコントラスト
  - b 同化主義、一面の銀世界
  - c 差異主義、多色刷り
- 2) 多文化共生への志向
  - a 同化主義で多文化共生は可能か
  - b 近代市民社会の公私の二分界
  - c 統合主義（リベラル多文化主義）における多文化の位置
  - d 多文化主義の目指すもの
  - e 文化相対主義の危うさ
- 3) 総務省研究会の「多文化共生」
  - a かつての「協和」的同化との違いは？
  - b 視野の中心からはずされた人々結び：差異からの自由
- (9) 成績評価の方法：

以下の3点から総合的に評価する。1) 『多元文化』や『Autres』に掲載されている論文、研究報告などの一作について口頭で批評を行なう。2) 授業中に挙げる論文あるいは著作について、口頭発表する。3) 学期末に筆記試験ないし口頭試験を受ける。
- (10) 教科書：

必要な文献は、授業の中で適宜指示する。
- (11) 参考書：

必要な文献は、授業の中で適宜指示する。
- (12) 注意事項：なし

(1) 講義名：文化記号論 a

(2) 副題：記号論入門

(3) 担当教員：古田香織

(4) 開講時限：火曜3限

(5) 教室：文総 522

(6) 目的・ねらい：

記号論について、講義と文献読解（授業中に指示）により、その基本的理論、概念、方法論について学び、それらを実際の分析へ応用することによって、文化現象を多角的に捉えることのできる視野を養う。すなわち、記号論が、言語・文化の具体的な事象に

どのように応用されているのかについて色々な分析例に触れ、様々な理論の個々の研究への応用力を養う。学生諸君のそれぞれの研究テーマが記号論とは直接関係がないとしても、この授業を通して、柔軟な思考力・応用力・分析力を身につけてもらいたい。

(7) 履修条件等：

- 1) 受講にあたり、池上嘉彦著 『記号論への招待』岩波新書を読んでおくこと。
- 2) 後期開講の「文化記号論 b」を併せて受講することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

まず、講義を通して、記号論の全体像をつかんでもらう。すなわち、基本的な用語や考え方、主な記号論研究者についての知識を身につけてもらう。その上で、記号論という学問をさらに理解するために、記号論的な考え方やアプローチを用いた、あるいは応用していると思われる論文を発表形式で読みながら、さらに記号論についての見識を深めていく。

〔授業方法および計画〕

第1回目：教科書や参考書、授業についての細かい指示（発表の順番等）を行うので、受講予定者は必ず出席すること。

第2回目：記号論についての講義を行う。おもに、池上嘉彦著 『記号論への招待』の中で取り上げられている様々な記号論の概念について説明する。第一回目に指示した箇所について必ず予習をしてくること。

第3回目：引き続き記号論についての講義を行う。第2回目に指示した箇所について必ず予習をしてくること。

第4回目以降：この回以降は、発表形式による文献読解を行う。受講者は各自記号論に関する論文を読書報告する。他の受講者もあらかじめ読んでおき、報告の後で、質疑応答、ディスカッションを行う。

(9) 成績評価の方法：

評価は、課題（読書報告・レポート）および出席点による。受講者に担当してもらう口頭発表を40%、授業最終時に提出してもらうレポートを40%。さらに、授業中の態度、積極的な発言や討論への参加度を20%程度として加味し、総合的に評価する。

(10) 教科書：

特に指定はせず、適宜プリントを配付する。

(11) 参考書等：

- ・池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書（必読文献）
- ・ウィリアムスン著、山崎／三神訳『広告の記号論Ⅰ、Ⅱ』柘植書房
- ・石田英敬『記号の知／メディアの知』東京大学出版会

その他、授業中に指示する。

(12) 注意事項：

受講を検討しており、初回の授業に参加できない場合は、前もって個別に相談に来ること。

(1) 講義名：中南米言語表現論演習 a (2010 年度から多元文化論講座で開講)

(2) 副題：スペイン語・ポルトガル語言語文化圏対照研究 a

(3) 担当教員：水戸博之

(4) 開講時限：前期木曜 4 限 (受講者と相談の上、変更あり)

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい：

(中南米言語表現論演習 a では、スペイン語圏を中心に扱う予定であるが受講者の諸条件を考慮し柔軟に内容を検討する。)

スペイン語とポルトガル語、両言語を広い視野から総合的に対照し知識と理解を深めるための演習である。すなわち本演習において、これら 2 言語自体に対し様々な領域や場において接触する可能性のある受講者が、研究を進めるための方法論に言語学的基礎付けする機会を見出すことを目的としている。なぜならば、東海・中部圏はこれら 2 言語に対する社会的需要が高く、問題に対処するためには、単なる会話能力のみならず、高度な言語学的素養も求められているからである。

本演習では、2 言語への習熟が単位認定の基本的要件となる。しかしながら、近親言語であっても両言語を等しく、いわゆるバイリンガルに扱うのは実際には極めて困難であるので、まずイベリア半島起源の言語に関わる知見を広げてみようといった好奇心を第一に課題に取り組んで欲しい。

(7) 履修条件等：

少なくともスペイン語またはポルトガル語いずれかの基礎的運用力。

いずれか一方を主専攻言語、他を副専攻言語と本演習では呼称する。スペイン語またはポルトガル語話者の留学生諸君の受講も歓迎する。留学生諸君は単なるインフォーマントとしての演習への参加のみならず、日本語および近親言語との比較対照により、母語について新たな発見とより深い認識が得られるであろう。

(8) 講義内容：

〔概要〕

演習であることから、様々な目的や条件を持った受講者に対応するため、開講時点では特に定めない。また、シラバス編集上、スペイン語圏とポルトガル圏とに分けて記載するが、両言語圏を並行して扱うことも可能である。

〔授業方法および計画〕(スペイン語圏関係を中心に)

以下に、過去数年間の主要な内容を示すので参考にしてほしい。

2010 年度：「解放の神学」の先駆的实践者の一人、アルゼンチン人神父カルロス・ムヒカの伝記(スペイン語)の始めの部分を講読。第二次世界大戦前後からペロン復権までのカトリック教会と社会に関する考察を行った。

2009 年度：演習 a は、スペイン語とポルトガル語と二つのグループに分けて実施した。

スペイン語圏専攻者のためのグループは、各週ほぼ 1 作の割合で、スペイン語圏各国を

代表する劇映画を視聴し、各地域の言語文化的特性を分析した。

ポルトガル語のグループは、ポルトガル語を専攻語学とする受講者とブラジル人留学生を対象に、日本語とポルトガル語の双方向のコミュニケーションを目標に、日本の新聞に現われたブラジル人コミュニティに関する記事の講読、ブラジルで制作された映画のポルトガル語字幕の活字おこしを通じた聴解練習とコミュニケーション分析などを行った。

2008 年度：文献の精読：ペルー農村部の教育問題、北部メキシコの農村の社会的変動

2007 年度：文献の精読：ペルーの国民文化形成、メキシコ社会の変容等。留学生を交えた討論等。 2006 年度：南米移民についての資料研究、発表、スペイン語文献の精読。留学生を交えた討論等。

2005 年度：スペイン語史・語学に関するスペイン語文献の講読と発表、討論。

複数年度にわたり適宜対象としてきた演習内容：日本国内制作のスペイン語・ポルトガル語メディア。日本国内のスペイン語話者、ポルトガル語話者の言語社会的状況。

(9) 成績評価の方法：

スペイン語とポルトガル語 2 言語への習熟を前提に、次の 3 要素を中心に総合的に判断する。

- 1) 各自のテーマについての発表（学会・研究会等の発表も含む）。40%
- 2) 講読文献（スペイン語・ポルトガル語両言語）の精読による発表。40%
- 3) 副専攻言語（スペイン語またはポルトガル語）による作文演習（ネイティブチェックを受けること）。20%

(10) 教科書および(11) 参考書等：

最近使用した主要なものを掲載する。（スペイン語関係）

Martín de Biase, *Entre los fuegos Vida y asesinato del Padre Mugica*, Buenos Aires, 2009.

Jose Maria Arguedas, *Formación de una cultura nacional indoamericana*, México, 1998.

Milton M. Azevedo, *Introducción a la lingüística española* 2 ed., Pearson Education (New Jersey), 2005.

María Asunción Merino Hernando, *Historia de los inmigrantes peruanos en España*, Madrid, 2002.

E. Garduño; E. García; P. Morán, *Mixtecos en Baja California el caso de San Quintín*, Ciudad de México, 1989.

Eliana Ramírez Arce de Sánchez Moreno, *Estudio sobre la educación para la población rural en Perú* (Proyecto-FOA-UNESCO), s. f..

視聴した劇映画：「ラベリント・デ・パン」「ベンガ」「エビータの真実」「100 人の子どもたちが列車を待っている」「地下の民」「大きな翼を持った老人」「ローマの奇跡」「予告された殺人の記録」「わが心のマリア」「鳥の歌」

(12) 注意事項：

